

平成 29 年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業



『礼に始まり礼に終わる』大妻中学校での合気道授業

平成 29 年度中学校武道授業(合気道)指導法研究事業〔主催＝(公財)日本武道館・(公財)合気会・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝大妻中学高等学校〕は、平成 30 年 2 月 10～11 日の 2 日間、日本武道館大会議室(東京都千代田区)において実施された。今年度は、大妻中学高等学校(千代田区)での合気道授業視察による指導法研究に加えて、(公財)合気会発行の『合気道指導の手引』の内容検討を中心に実施された。

■1 日目(2 月 10 日)

開講式では、はじめに栗林孝典合気会渉外部長が主催者挨拶に立ち「平成 24 年度から中学校武道必修化が始まり、本研究事業や全国研修会での指導法研究・実践例発表により、合気道授業採用のためのいろいろなノウハウを培ってまいりました。しかしながら、中学校武道授業に合気道を採用していただいている学校は、46 校に留まっております。今回は、昨年日本武道協議会により刊行された『中学校武道必修化指導書』を元にしながら、主眼は本日お集まりいただいた研究者の先生方の意見や知恵をお借りして、より良い『指導の手引』を作成したいと考えておりますので、ご協力の程、よろしくお願いいたします」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶し「中学校武道必修化が始まり、6 年が経過しま

した。昨年は次期学習指導要領に武道 9 種目が並列明記されるということが決まり、大きな前進がありました。いよいよ条件は整い、平等の形でのスタートとなるわけです。課題は、武道授業時間の減少です。武道振興大会の決議文では、武道授業の時間増と外部指導者の活用を、最大眼目として記載しています。中学校では、教員の負担を減らすということで、部活動指導員を制度化することが国の政策として決定しました。この動きを中学校武道必修化でも取り入れてもらいたいと考えております。本研究事業で研究協議をした成果を、全国研修会や全国の実施校にしっかりと繋げていく努力も大事だと思います。合気道の素晴らしさを全国の中学生に味わっていただくために、良い計画が実行できるよう努力して参りたいと思います」と述べた。

開講式終了後、現在絶版となっている『合気道指導の手引』の改訂版を作成するための内容検討に入った。金澤威研究者が座長を務め、国際武道大学教授で教員養成を担当している立木幸敏研究者、東京都立江北高等学校、大妻中学高等学校でそれぞれ合気道授業を行っている佐藤貴研究者、平野真央研究者に意見を求め、想定する授業計画案・時間数の設定や掲載する技の選定を行った。

定刻、平野研究者の勤務校である大妻中学高等学校に移動し、合気道授業を視察した。大妻中学高等学校は、東京都千代田区にある私立の女子中・高・大の

一貫校であり、授業を担当するのはバレーボールを専門種目とする坂本和莊教諭。坂本教諭は毎年8月に合気会が主催している学校合気道実技指導者講習会を受講し、合気道経験のある平野研究者の指導の下、合気道授業を行っている。この日の授業の対象は中学校1年生38名(見学者1名)で、全7時間中4時間目の授業で、内容は「相半身片手取り小手返し」の導入であった。まず手首の掴み方の単独練習を行った。その後ペアを作り、相対で掴み方を練習した。坂本教諭は、相手の手首を捻り過ぎないように注意を促し、「技の練習を通じて相手の痛みをわかる人になってください」と指導した。その後、前時までに学習した受身・歩み足・転換足・転回足を活用し、実際に技を練習した。うまく動作ができないペアに対して、他の生徒が教え合う場面も見られた。授業の最初と最後には、全員で正座し「礼」を行い、畳の代用として使用しているパズルマットを生徒全員で片付けた。

栗林合気会渉外部長より、授業を行った生徒と坂本教諭に対し「多くの中学校で合気道授業を採用していただくための、大変良い参考になりました」と感謝の言葉が述べられた。

日本武道館に戻り、研究者それぞれが授業視察の感想を述べた。平野研究者が「本校の合気道授業は技の完成を目指すのではなく、坂本教諭が『技の練習を通じて相手の痛みをわかる人に』と指導していたように、道徳的な指導を主な目的として合気道授業を行っている。合気道授業の目的に応じて、手引の内容が変わってくるのではないかと意見を述べた。

引き続き、『合気道指導の手引』改訂版の内容検討に入った。現行の手引や『中学校武道必修化指導書』にトピックとして掲載している「やってみよう！」に加えて、アクティブラーニングの観点から、生徒自身に正解を導き出させるために「考えよう！」のトピックを加えることが決まった。また、これまでの手引や指導書は、技の動作に説明の重点を置いていたが、合気道を専門としない保健体育科教員が授業で説明することを想定し、「何故その動作を行うのか」「その動作にどんな意味があるのか」ということを掲載していくこととなり、その文言を議論した。「構え」「礼法」「技」の順に議論を進め、「礼法」の場面では、小笠原流礼法や他の武道種目の『中学校武道必修化指導書』からヒントを得て、文言を検討した。

■2日目(2月11日)

前日に引き続き、『合気道指導の手引』改訂版の内容検討を行った。この日は「技」の内容検討に終始した。これまでの手引や指導書に扱われていた「相半身片手取り入身投げ(転回足)」は、「受身を取る際は^{へそ}臍を見るように指導することを基本としているのに、受が顎を上げる体勢になるのは、中学校授業で現実的に扱いづらいのでは」という意見が上がり、「相半身片手取り入身投げ(転回足)」は技の紹介のみに留め、それまでに履修させた技(小手返し、一教、四方投げ等)の発展形に切り替えることとなった。



実技を交えた議論の様子

閉講式では、立木研究者、佐藤研究者、平野研究者がそれぞれ事業の講評・感想を述べ、最後に金澤威合気会総務部長と端春彦日本武道館振興部振興課副主事が挨拶し、全日程が終了した。

【研究者の声】

◇立木幸敏研究者

今回は我々の目で中学校の合気道授業現場が見られたということが、とても有意義だった。今後、現場の先生の役に立つマニュアルや手引作成につながれば良いと思う。

◇佐藤貴研究者

合気道は元々全くの素人だった私が、初めて合気道授業を担当した際、手引や指導書がとても参考になった。実際に授業をやってみたことを、新たな手引の参考として役立てていただければ大変うれしい。

◇平野真央研究者

今回授業視察にお越しいただけたことで、本校に必要な課題も見えてきた。私は合気道を経験した上で授業を考えていますが、今後、合気道未経験の教員が授業をしていくことがとても大事だと思った。